



総政人の巧 連載第1回 伊藤 慎弉さん ~ 行政 管理研究センターからの便り ~

著者	伊藤 慎弉, 三浦 哲司
雑誌名	同志社政策科学研究
巻	8
号	1
ページ	199-204
発行年	2006-07-25
権利	同志社大学大学院総合政策科学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000010984

総政人の巧

連載第1回

財団法人行政管理研究センター研究員 伊藤 慎 氏さん

～行政管理研究センターからの便り～

インタビュアー 三浦 哲 司（博士前期課程2005年度生）



同志社大学東京オフィス前にて

大学卒業後に初めて関西の地へ、そして京都での大学院生活

【三浦】今回から始まりました、同志社大学大学院総合政策科学研究科関係者のお仕事についてレポートする「総政人の巧」。記念すべき第1回目は、財団法人行政管理研究センター（以下、「行管センター」）研究員の伊藤慎氏さんです。伊藤さんは博士前期課程、博士後期課程ともに公共政策コースに在籍され、真山達志先生の下で政治学や行政学を研究されてこられました。そして、昨年の11月からは行管センターにて勤務

されています。それでは本題に入る前に、まずは本研究科に進学されたきっかけから教えていただけますか。気楽にいきましょう（笑）。

【伊藤】私はもともと関東の出身でして、関東の大学に通っていました。学部は法学部だったのですが、学部時代に授業を通じて行政学に興味を持ち、大学院での研究を志しました。そして、大学院を選ぶ際に、学部時代の行政学の授業テキストだった『ホーンブック行政学』の著者の一人である真山達志先生の下で研究したいと考え、本研究科を受験。何とか合格することができ、進学するに至りました。

【三浦】なるほど。ご出身の関東を離れて、関西という地での大学院生活、いかがでしたか。

【伊藤】自分の研究はもちろんですが、本研究院生会の会長や授業のティーチング・アシスタントをさせていただいたり、あるいは他大学の先生の下でNPO法人の調査研究をさせていただいたり、非常に充実していました。特にティーチング・アシスタントの仕事については、私自身も大変勉強になりました。統計学にも触れることができましたし。

かねてからの志望勤務先であった行政管理研究センターへ

【三浦】さて、昨年の11月からは、行管センターで研究員として勤務されている伊藤さんですが、それでは徐々に本題に入っていきたいと思えます。もともと伊藤さんは行管センターでの勤務を志望されていたか。

【伊藤】その通りです。以前から研究員としてシンクタンクで仕事をするには興味を持っていました。ただし、行管センターでの勤務というのは本当に急に決まった話なのです。行管センターでは研究員の採用は不定期の形を取っているのですが、たまたま研究員に欠員が出て、指導教授の真山先生からお話を頂戴し、喜んでお引き受けすることになりました。もっとも、私が

行管センターでの勤務を強く望んでいるということは真山先生にはお伝えしていなかったので、お話をいただいた時に私が「ぜひやらせて下さい」と即答したことには少々驚いているご様子でした（笑）。

【三浦】（笑）大学院生活を通じて、指導教授である真山先生の存在はやはり大きかったですか。

【伊藤】もちろんです。実を言うと、私は博士前期課程を3年やりました。先ほど、学部時代に行政学に興味を持ったという話をしましたが、博士前期課程の1年目は非常に幅広い分野にわたって勉強をしていました。ところが、1年目の終わりになってようやく自分の研究の核となる学問分野を作っておく必要があることに気が付きました。そのため、2年目にはもう一度原点に戻って行政学を最初から勉強し直しました。結果、2年目の11月頃ようやく研究テーマを絞り込むことができたのですが、時すでに遅し。当然ながら1ヶ月では修士論文を書き上げることはできませんでした。そのため、3年目に入ったのですが、この1年間は本当に勉強しました。ゆとりなど全然ありませんでした。ただ、そんな中でも、真山先生はいつも優しくご指導してくださいました。だから最後まであきらめずに修士論文を完成させるために頑張り抜くことができました。今振り返ってみますと、博士前期課程の3年目の経験というのは、私にとって非常に大きかったです。



伊藤慎式(いとうしんすけ) 1975年生まれ。東京都小金井市出身。同志社大学大学院総合政策科学研究科博士前期課程修了。同博士後期課程2003年度生。研究テーマは「政策実施研究～公共サービスの供給形態のあり方について」。

コラム 行政管理研究センター

財団法人行政管理研究センターは、行政管理に関する理論と諸技術についての調査・研究・開発を行い、また知識の普及や啓蒙等を図り、それによって我が国の民主化、合理化及び効率化に寄与することを目的としている政府系シンクタンクです。

本研究科教員のなかでは、今川晃先生・新川達郎先生・真山達志先生・山下淳先生・山谷清志先生がかつて研究員として在籍されていたこともあり、本研究科と深いつながりがあると言えます。

行政管理研究センターでの業務と現在の自分

【三浦】 それでは、大まかで結構ですので、行管センターではどのようなお仕事をされているのかをご説明いただけますか。

【伊藤】 研究員の仕事というのはいくつかあります。たとえば、自治体職員向けのセミナーの開催です。これには、「個人情報保護法セミナー」や「政策評価研修」などがあり、大学教員をはじめとする研究者の方々にご講演や講師をしていただくというものです。私自身は、これまでに「個人情報保護法セミナー」と「行政苦情救済セミナー」のお手伝いをさせていただきました。

そのほかには、どちらかといえばこちらが主な仕事と言えるのかもしれませんが、総務省から委託された研究テーマについて調査をし、報告書を提出するというものがあります。これについては、単年度の研究テーマの場合もあれば、複数年度にわたる研究テーマの場合もあります。それで、たとえば「行政参加」という研究テーマが決まったら、それをご専門にしておられる大学教員の方に委員長のお仕事をお願いし、その委員長を中心にプロジェクトチームを結成して、報告書作成のために活動を始めることとなります。そのプロジェクトチームは総務省の職員の方々、委員長をはじめとする大学教員の方々、行管センターの研究員から構成されます。例年では、だいたい一年間に5つから6つのプロジェクトチームが作られることになっています。

【三浦】 研究テーマというのは総務省から一方的に委託されるのですか。

【伊藤】 少し詳細に説明しますと、基本的には、行管センターは受託者ですから、総務省から委託されたテーマについて、調査研究を行います。但し、行管センターの各研究員が作成した研究企画案を総務省に提出し、その中から総務省が選定を行い(研究テーマの決定)、再び行管センターに調査研究を委託するという形を取ることもあります。

自らが作成した研究企画案が総務省の選定を通過した場合には、企画担当の研究員は自らが適任と考える大学教員に委員長のお仕事を依頼したりなど、プロジェクトチームの結成に向けて動いていくこととなります。これは、自分が作成した企画に基づいて調査研究が行われること

になるわけですから、かなりやりがいがあると思いますよ。私自身はまだ経験していないのですが...(笑)。もちろん、行管センターの研究員同士では、自分が企画した以外のプロジェクトチームに参加して、サポートを行うこともしばしばあります。

【三浦】 伊藤さんご自身も何かのプロジェクトチームに参加されているとお聞きしています。

【伊藤】 私は途中から行管センターに入りましたが、その時にはすでに多くのプロジェクトチームの調査研究が半ばに差し掛かっていました。そのため、私が途中参加し、イニシアティブを發揮して活動できるプロジェクトチームはありませんでした。ただし、12月頃から「諸外国における個人情報保護法制」の調査研究を行うプロジェクトチームが本格的にスタートしまして、現在のところ私はこのプロジェクトチームの担当をさせていただいているところです。

【三浦】 そうすると、総務省の職員および大学教員との間に入ってお仕事をされることになると思うのですが、そのあたりで何かご苦労されていることなどはありますか。

【伊藤】 総務省から何々について調べてほしいという調査依頼があり、総務省の職員、大学教員、行管センターの研究員という3者がプロジェクトチームを組んで調査研究を行っていくのですが、ここで苦労するのが期限の問題です。調査研究には当然のことながら総務省の予算がついていますよね。そのため、予算の期限をしっかりと守らなければ、以後の調査研究の予算にも影響してしまいます。こうしたことから、総務省の職員としましては、調査研究の期限は必ず守ってもらわなければ困るのです。一方で、大学教員には、研究者という立場からも、調査研究に対するものすごい情熱がある。つまり、妥協は許さず、よりクオリティーの高い研究成果を出すことを目指すのです。そうなってしまうと、大学教員は調査研究の期限よりも質を重視することになりますよね。こうしたことから、総務省の職員と大学教員との間でギャップが生じてしまい、この両者から板ばさみの状態にある行管センターの研究員は、そのあたりで苦労があるみたいですよ。総務省の職員には総務省の職員としての事情、大学教員には大学教員としての事情があり、行管センターの研究員はそれらのどちらも分かっているだけに、調査研究自体をすり合

わせていくのはなかなか大変なようです。もっとも、私はまだまだ新人ですから、このような役目は上司が担っております。ただ、上司を見ていると、こうした問題に骨を折られている様子がよく分かります。

【三浦】 なかなか大変そうですね。しかしながら、その一方で総務省の職員、大学教員、行管センターの先輩研究員をはじめ、いろいろな人との交流がありそうですね。

【伊藤】 その通りです。私は京都にいた頃から他大学の先生方や大学院生とは交流の機会を多く持たせていただいていたほうだと思のですが、やはり研究員としてこちらでいろいろな業務に携わっておりますと、必然的に多くの方々との交流の機会がありますね。行管センターご出身で現在は大学教員をされている人はもちろんのこと、他分野(行政学以外)を専門とされる多くの大学教員、総務省をはじめとする官僚、今は現役を退いておられる学者や官僚など、非常に多くの人と接することが多々あります。そう考えてみますと、私自身はとても恵まれた環境にいるのだと思います。

【三浦】 本当に様々な人との交流がありますね。そういった交流というのは、伊藤さんご自身にとってどのようにプラスに働いていますか。

【伊藤】 多くの交流の機会があるなど恵まれた環境にいるにもかかわらず、まだまだ私自身それを活かさきれていないというのが本音です。行管センターの先輩研究員はみんな非常に優秀で、交流の機会から得られたものを自分の中にしっかりと吸収し、着実にアウトプットしています。それゆえに、行管センターは実力があり、積極的に活動する人にとっては、自ら自分にプラスになるような仕事を作ることができるという意味で最高の場所だと思っております。しかし、もし実力がなければ行管センターにおける素晴らしい機会を活かすことはできないままで終わってしまうこととなります。つまり、すべては「自分の実力とやる気」次第なのです。私の場合はまだまだ恵まれた環境を活かさきれていない。環境は整っているにもかかわらず、有効に活用できていない状態です。だから、自ら活動して何かを作り上げていくことができるように早くならなければいけないと日々実感しています。

【三浦】 毎日精一杯お仕事に励まれているのが伝わってきます。これまでお仕事をしてきた中

で何かエピソードはございますか。できれば面白い話とか(笑)。

【伊藤】 エピソード(笑)。うーん、プロジェクトチームのミーティングの後にはよく飲みに行ったりもするのですが、ミーティングの時にはものすごく真面目に議論していたかと思えば、飲み会になると別人のようになる人がいたりして楽しいですね。また、お酒の席でもプロジェクトチームに参加されている大学教員や総務省の職員とお話をさせていただくことも多々あり、そういった機会も非常に有益ですね。体験談を聞かせてくださったり、貴重な情報をいただきたりします。もちろん、行管センターの先輩研究員も面白い話をしてくださったり、また学術的に刺激されるような話も聞けたりしますね。

【三浦】 それはご自身にとって大きな財産になりますね。ところで、これまでのお話をお伺いしていますと、行管センターは大学教員および総務省の職員と接触する機会が多いということですが、研究者と実務家のそれぞれに対して、どのように貢献しているということになるのでしょうか。

【伊藤】 理論と実践をつなぐ役割を果たしているということになるのだと思います。先にも少し触れましたが、行管センターでは毎年いくつかの報告書を出しています。この報告書をご覧になられた方でしたらお分かりになると思うのですが、既存研究や理論研究を検討した上で実態調査を行っています。つまり、学術的にも実務的にも有用な研究成果を出すことを目指しているのです。

今は大学教員としてご活躍されている行管センター出身の先生方、あるいは先輩研究員の方々が参加されたプロジェクトチームの報告書を見てみますと、私と同じくらいの年齢の時に、すでに相当レベルの高い研究を行っておられたということが分かります。こういったこともかなり刺激になりますね。

行政管理研究センターのこれからと自分

【三浦】 行管センターの今後の展望を教えてくださいいただけますか。

【伊藤】 今日まで行政に関する問題というのは、長年にわたる研究成果の蓄積もみられ、総論的

にはある程度検討されたと言えると思います。そのため、これからは新たな切り口で今日的な問題を扱っていかねばなりません。そう考えてみますと、今後は海外も視野に入れつつ検討されていない研究テーマを発掘し、それについて調査検討していくことになると言えます。

また、現在、行管センターではホームページのリニューアルを検討しています。これにより、一層の情報発信が期待できると思います。

【三浦】伊藤さん個人としては。

【伊藤】行管センターは1977年に設立されました。そのため、来年で30周年になります。私はまだまだ半人前で、毎日自分の業務をこなすのに精一杯の状態ですが、30周年を迎える頃までには「行政管理研究センターの研究員である」と自信を持って言えるように、今後とも仕事をしっかりとこなしていければと思います。

みなさんへ

【三浦】最後に、本研究科関係者および本研究科への進学を志望している方々に対して、何かメッセージをお願いできますか。

【伊藤】まず、先生方に対してですが、本当にお世話になりましたということをお伝えしたいと思います。自分の研究分野に限らず、多くの先生方にお話を聞いていただいたり、アドバイスをさせていただいたり、感謝の言葉は言い尽くせません。本来でしたら、先生方お一人お一人にこ

の気持ちをお伝えしたいところです。これからは、自分の研究のアウトプットがお世話になった先生方に対しての恩返しという形になれば一番いいですね。

次に院生の方々に対してですが、特に学部から進学された院生の人たちに言いたいのですが、能力があるにもかかわらず少しおとなしすぎるのでは、と感じています。もっと積極的に講義やゼミでの議論に参加し、独自に研究会を行ったりなど、自発的な活動を行う必要があると思います。「受け身ではなく、常に自分から動く」という姿勢を心がけてほしいですね。私自身に関して言うと、博士前期課程の時には、当時真山ゼミのティーチング・アシスタントをされていた高橋克紀さん(現・姫路獨協大学)に授業における疑問点を聞いたり、研究を進める上でのアドバイスをいただいたりしていました。もっとゼミのティーチング・アシスタントの方との交流を図ったりしてもよいのではないのでしょうか。また、院生の中には学部の授業のティーチング・アシスタントの仕事をしている方もおられると思いますが、ただ仕事をこなすのではなく、それを通じて自分の研究に役立つものを発見するといった積極的な態度を心がけること、このことがいずれは何らかの形で役に立つのではないかと思います。さらに、研究は体力勝負であるということは声を大にして言いたい。私のように、腕立て伏せを100回やりなさいとまでは言いませんが(笑)、ジョギングなどの軽度な運動でも結構ですので、日ごろから基礎体力を付けておく

コラム 東京オフィス

今回のインタビューは同志社大学東京オフィスにて行わせていただきました。

東京オフィスは、本学が推進する教育・研究や大学改革をはじめとする諸活動の首都圏における拠点として、必要な情報の収集・発信を行います。また、東京オフィスにおいて行われる大学主催の行事、教育研究活動、産官学連携事業、学生の就職活動等を支援するとともに、卒業生のみなさんの情報交換や交流の場として支援を行います。

本学学生は、東京オフィスにおいてインターネット検索等による情報収集、就職活動情報誌の閲覧や更衣室の利用、卒業見込証明書・成績証明書・健康診断証明書・学割の発行を受けることができます。また、就職相談を受けることも可能です。

本学教職員は、学会・研究会・情報交流等に、卒業生の方は、校友会等卒業生団体主催の集会等にセミナールームなどが利用できます。

同志社大学ホームページ、施設利用案内「東京オフィス」より。
http://www.doshisha.ac.jp/information/facility/tokyo_0/

ことを強くお勧めします。私の経験上、論文は体力勝負のところ意外にウェートを占めますしね（笑）

そして、本研究科への進学を考えられている方々に対しては、学習環境の素晴らしさを強調したいと思います。本研究科の先生方は第一線でご活躍されている方々ばかりであり、研究分野も非常に幅広いといえます。そのため、多くの先生方の中から、自分の研究に最適な先生を指導教授として選び、指導していただくことができます。また、社会人院生の数も多く、日常生活

ではおそらく接する機会がないような方々との交流ができるのも本研究科の強みであると言えます。もちろん、社会人院生と学部から進学した院生との交流もあり、双方に刺激し合えると思います。さらに、24時間利用可能な研究室や研究科独自の図書館をはじめ、設備も非常に充実しています。学習環境は最高ですので、それを活かすかどうかはご自身次第ということですね。

【三浦】 本日はありがとうございました。伊藤さんの熱意がひしひしと伝わってきました。今後のご活躍も楽しみにしています。



行政管理研究センターでの伊藤さんの勤務風景
（左は現明治大学助手で元研究員の菊地さん）

募集しています

「総政人の巧」では、読者のみなさまからのご意見、ご要望、ご感想をお待ちしております。どんなことでも結構ですので下記の連絡先までお寄せください。この企画は読者のみなさまとともに作り上げていくことを目指しています。

「総政人の巧」企画部会 三浦哲司
yiu51983@nifty.com